

## 立石岬灯台職員ゆかりの墓

海上保安部長として勤務した敦賀保安部管内の立石岬灯台は、敦賀半島の先端に位置し、明治14（1881）年に石造り灯台として初めて日本人のみにより建設されたと言われている。由緒ある灯台です。

ある日、その立石岬灯台の麓にある集落の方から「集落内にある共同墓地を移設した際に、墓地内にいる灯台職員ゆかりの墓も移設したので見に来てほしい」との話がありました。現地に行ってみると、新しい集団墓地の真ん中に

小さな古いお墓が丁寧に祭られています。墓石の裏側に消えかかった名前を読み取って保安部で調べると、大正時代に立石岬灯台に勤務していた灯台職員のご家族のお墓であることが判明しました。

かつて岬の先端に通じる道路はなく、灯台職員は敦賀の市街地から灯台への行き来には船を使っていたそうです。そのような時代に、灯台併設の官舎で亡くなり、麓の墓地に埋葬されたものと推察されました。

## 地域の思いをつなぐ灯台の灯

村の方々が代々守ってこられたのでした。灯台というものに対する地域の方々の思いを実感する出来事になりました。

敦賀市の市章の意匠にはその立石岬灯台が使われています。灯台は海上保安官が考えている以上に地元の方々にとって身近な存在なのかもしれません。そして、灯火の点灯状況の監視や灯台周辺の敷地の草取りなど、灯台をはじめとする多くの航

路標識は、地域の方々の献身的な協力により支えられています。また、最近では、灯台が文化財や観光資源といった地域の財産として活用されることも多くなってきました。敦賀海上保安部時代には、同じ管内の越前岬灯台が地震などにより崩落する危険があると判明し、灯台を移設したことがありました。その際、当初の計画では灯台内の階段を垂直梯子型にする予定でしたが、地元の要望を受けて旧灯台と同様の螺旋階段に変更しました。その越前岬灯台が、

一般公開され、観光地・越前海岸のシンボリック的存在として位置付けられていることとはうれしい限りです。GPSによって船舶位置の把握が容易となり、自動運航技術が進展する時代にあっても、沿岸海域での船舶航行や漁業活動にとつて、灯台をはじめとする航路標識が重要な存在であることに変わりはありません。地域の方々との連携を深め、その協力を得ながら、灯台の灯が引き継ぎ守られることを願っています。



立石岬灯台＝不動まゆづ氏撮影

路標識が重要な存在であることに変わりはありません。地域の方々との連携を深め、その協力を得ながら、灯台の灯が引き継ぎ守られることを願っています。

（第45代海上保安庁長官）  
二つづく